SIGN　外伝

WhiteEight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＩＧＮ　外伝

【Ｎコード】
Ｎ４４３０Ｉ

【作者名】
ＷｈｉｔｅＥｉｇｈｔ

【あらすじ】
”霊による死”が間近に迫っている”サイン”を知る事の出来る少女…優。彼女は霊のために霊を祓うことを決意する。長編アクションゴーストファンタジー！
外伝ではサイドストーリーや、サブキャラにスポットを当てた話などを掲載していきます！

第1話　奥里の脅威1

ＳＩＧＮ　外伝

第１話　奥里の脅威１

６月某日…

白凪茜は奥里の九鬼家に呼び出しを受け、電車にて向かっていた。

数時間後…奥里に到着。

東部久木とは違い、北部奥里は山々が多く、自然溢れる土地だ。

「お迎えに上がりました」

駅には若い女性が待っていた。

どうやら九鬼家の従者らしい。

「はじめまして。白凪茜です」

「遠路はるばる、ご足労ありがとうございました。

九鬼（くき）　葵（あおい）と申します」

深々しくお辞儀をする女性。

「これはこれはご丁寧に。次期当主様でしたか。」

「まだまだ未熟者ですが、父に負けないように精進していきたいと思います」

「おい！葵ー！とっとと家に向かうぞ」

後ろの方に泊めてある車の中から呼び声が聞こえる。

「し、失礼を！…あんの馬鹿…！」

ヅカヅカと車に歩み寄る葵。

「さっさといくぞ…って…なんだよその眼…おい…ちょ！？」

バコン！！

車の窓から覗かせる顔面に思い切りパンチを食らわせる葵。

「まったく！恥を知りなさい！」

「…元気な娘さんじゃな…」

葵と茜は車に乗り込んだ。

――

――

「この馬鹿は石動（いするぎ）　和馬（かずま）といいます。
九鬼家の従者として勤めている者です」

「茶髪…にピアス……。
なんともはや…不良かの」

「これ（茶髪）は地毛だよ！ったく…」

「口が悪くて申し訳ありません…あとでまたシバいておきますから」

茜は後部座席から運転する和馬をじっと見つめた。

「…ふむ…
（力強い霊気を感じる…かなりの資質をもっておるな）」

「こんなんですが祓い師としてはなかなかの腕前なんです」

「こんなんって…おい！」

3人を乗せた車は山道を登っていく。

「今のうちに大まかな話を聞かせてもらってもいいかの？」

「はい…。実は強力な怨霊を捕らえまして…。
事の経緯は、ひと月前くらいでしょうか…九鬼家のある山の隣…
石神山（いしがみやま）という山があるのですが、そこに怨霊が住み着いてしまって…
怨霊は瘴気を放ち、木々を枯らし、山に入るものを迷わせ…時には殺すことも…。
死人や行方不明者まで出てしまっては流石に放ってはおけないと…私達は討伐に出かけたわけです」

「それで結局討伐出来ず捕らえるに至ったわけか」

「はい…。父も祖父も全力で戦ったのですが…なんとか捕らえるまでにしか至らず…。
今も九鬼家の地下室にて厳重に封印をしているのですが、結界にヒビが入り始めて…。
最悪結界を破り…封印から脱してしまう可能性があるということで白凪様を呼んだ次第です」

「清四郎殿や息子殿が全力をもってしても祓えぬとは…相当な相手じゃな…」

「祖父も父も、戦いで負傷し、今は療養中……他の3家にも助けを

求めたのですが…。
結果は…。
すみません…白凪様しかもはやすがるものがありません…」

葵は俯いて涙を浮かべている。

「大丈夫…葵殿。
全てを背負い込まないでもいいんじゃ…。
私等は同じ仲間…、困った時はお互い様じゃ」

茜は微笑んで言った。

「ありがとう…ございます」

葵も笑顔を取り戻した。

「…
（問題は相手がどれ程のものか…じゃな。
妖魔には間違いなさそうじゃ…清四郎殿が現当主の息子殿と組んでも祓えないとなると、
その線は間違いないじゃろう）」

程なくして山頂に到着。

立派な屋敷がある。
どうやらここが九鬼家のようだ。

「さぁ着いたぜ」

3人は屋敷に踏み込んだ。

―――
――

その頃…

とある山で一人、遊ぶ少年がいた。

「…ん？あれ…？」

「…」

白い狐が少年を見つめている。

「チチチチ…！おいで、おいで」

「…」

少年は中腰で口を鳴らしながら手招きをする。
白い狐はひょこひょこと少年の方に向かって走ってくる。
ついには少年の足元までやってきた。

「うわぁ…珍しいなぁ…真っ白い狐なんて、オイラはじめて見た」

「…ワシが見えるのか…小童」

「え？」

「…見えるのか…と聞いたのだ」

「しゃ…喋った……嘘！？」

少年は腰を抜かした。

「ふむ…ワシを見れる人間に会うのはいつぶりじゃろう…。
しかも言葉まで交わせるとはな」

「君…お化けなの？」

「まぁ…似たようなものだ」

「へぇ…。オイラ神楽由良葉って言うんだ。
君はなんて名前なの？」

「名か…久しく呼ばれておらぬうちに忘れてしまった…。
まぁ…”銀”とでも呼ぶがいい」

これが由良葉と銀との出会いだった。

―――
――

「由良葉は一人なのか？」

「うん…。オイラ友達いないんだ…。
皆オイラを化け物化け物って…だからいつも一人で遊んでるの」

「…
（この小僧…ワシを感じれる事からも、相当な霊気を持っている。
なるほどな…幾度となく霊を見てきたのだろう…それを周りに言った所で理解は得られまい）」

「銀は仲間はいないの？」

「おらぬな…ワシもお前と同じ一人ぼっちという奴だ」

「じゃあ、友達になってよ銀！」

何気ない一言だった。

由良葉の屈託のない笑顔から、自然と出てきたその言葉…。

精霊に近い存在の銀にはとても不思議な感覚だった。

「ワシが怖くはないのか…？」

「うん。…オイラお化けは沢山見てきたよ…。

しつこく追い掛け回す奴とか、襲ってくる奴もいっぱいいた。

でも銀は違うよ。

銀とは仲良くなりたいな」

「……それも悪くはないかもな…」

「あは！」

――

――

「ようこそ九鬼家へ。茜ちゃん久しぶりじゃな」

「清四郎殿もお変わりなく…思ったより元気そうじゃな」

出迎えたのは先代当主、九鬼清四郎だ。

齢７０過ぎの白髪交じりの頭をした品のよさそうな老人だ。

「葵、和馬ご苦労だったな。
ワシは茜ちゃんとちょいと話があるからもう行っていいぞ」

「はいおじい様」

葵と和馬は別室へ入っていった。

「礼儀正しい、よい孫を持ったな清四郎殿」

「うむ。自慢の孫じゃよ。ふぉっふぉ！」

「早速じゃが、例のものを見せて貰おうかの…」

「…ふむ。大よその話は葵から聞いたようじゃな。案内しよう」

清四郎は茜を連れ、地下の隠し部屋へとむかった。

「…」

「暗いからの。足元気をつけてな」

薄暗い地下へと続く階段。
何か途轍もない威圧感が底から伝わってくる。

「…さぁ、ついたよ」

先が明るくなっている。
階段を降りたら明るい部屋が現れた。

「これは……予想以上じゃな」

「だろ？……何があったか…どういう経緯で流れ着いたかはわからんが…。
　コイツは滅多にお目にかかれぬ…”鬼”じゃ」

目前には呪印で書かれた陣が広がり、その中心に黒い影がうごめいている。
わずかに人の形を成しているようにも見受けられる。

「封印して尚、この瘴気…。

常人ではここにたどり着くことも出来まい」

「ワシもコイツに食われてな…力の大半を持ってかれたわ」

茜は全身から冷や汗が出る感覚を感じていた。

「この状態から祓うのは厳しいのう。
封印を解いて…そこを叩く他無いか」

「じゃが…茜ちゃん。
正味な話…どうかね？やれそうかな？」

「…」

「弱っておるとはいえ…ワシと明正(あきまさ)二人掛かりでも仕留めれなかったほどじゃ。
”霊王眼”の能力…封印の刃に特化しとるワシ等九鬼家が…全てを封印できんかった…」

「まぁ…全力を持って戦う他あるまいな…全てを賭して」

その瞬間だった。

ビシッ！

何かが割れるような音が響いた。

「…！まさか…このタイミングでか！？茜ちゃん下がるのじゃ！！」

「くうッ！！」

ズズズ…！

先ほどの割れる音は結界石が割れる音だった。

縛り付けられていた黒い影が膨らみだした。

茜と清四郎は身動きが取れなかった。

圧倒的なプレッシャーを感じていたからだ。

どうにかしたい気持ちはあっても体が言う事をきかない。

そうこうしているうちに黒い影は地下室の天井を突き抜けて上に移動した！

「あ、茜ちゃん！」

「わかっておる！」

二人は急いで階段を駆け上った。

――
――

「…！！」

「和馬！」

リビングで寛いでいた葵と和馬は巨大な禍々しい霊気を感じ、立ち上がった。

ドタドタと清四郎と茜が玄関に向かって走るのを見るや否や、二人もあとを追った。

外に出ると邪悪な黒い影は雲のように膨れ上がり、屋敷の上空に留まっていた。
すると、徐々にその雲は縮んでいくと同時に高度を下げてきた。
地面に達する頃にはその形を人型に化していた。

「…やるしかないのう！」

茜は身構えた。

「…人間か」

黒い影はしっかりとした人の形になった。
全身浅黒く、筋肉質な男のようだ。
頭には鬼の象徴である角が2本生えている。

「主はやりすぎた…ここで祓わせてもらうぞ！」

「…」

じっと茜を見つめる鬼。

「人にしては位の高い気を纏っているな」

スッ

「！！？」

一瞬にして茜の目前に迫り、茜の顎に手をかけ、顔をあげさせた。
近くで見るとより大きさがわかる。
3mに迫るほどの大きさか。

「震えておるぞ…どうした？」

「…く…！」

茜は咄嗟に腕を突き出したが、その瞬間にはすでに遠くを歩く鬼。

「無駄な事はやめた方が身のためだぞ…人間」

そういって鬼は去っていった。

「く……！ここまで力の差があるのか…！」

「茜ちゃん…そう気を落すでない…。
まだ終わりじゃない…そうじゃろ明正」

玄関に出てきたのは頭に包帯を巻いた中年の男性だった。

「親父…。
ああ…そうだな！まだ終わりじゃない…全戦力をもって奴を追い詰める！
葵！和馬！戦闘準備だ！…奴を叩くぞ！」

第1話　完　　ＮＥＸＴ　ＳＩＧＮ…

第2話　奥里の脅威2

ＳＩＧＮ　外伝

第２話　奥里の脅威２

「準備は整ったな…奴はこの先の山に向かっていった。
あの瘴気だからな…すぐに場所はわかる！
急ぐぞ！」

九鬼明正の気合で、皆引き締まる想いだ。
逃げた鬼を討伐するため、白凪茜、九鬼清四郎、明正、葵…そして
従者の石動和馬の５人は、
十分に準備を整えた上で出発した。

山を翔ること十数分…。

「！…何か強い霊気を感じるのう…」

「鬼ではないな…む！？」

前方で怨霊に襲われている少年の姿があった。

「和馬！」

「ええ！？俺！？」

明正の命で和馬は目前の怨霊退治をすることに。
他の４人は和馬を残し、先を急いだ。

「ったく…なんで俺が…。
瞬殺で行くぞコラッ！！」

――
――

「瘴気が濃くなってきたな…奴め…何故遠くに逃げようとせんのだ？」

確かに逃げようと思えば余裕で振り切れるはずである。
それをしないのは何故なのか…。

故意なのか…だとすれば罠か。
はたまた出来ない理由があるのか…？

「皆！気を引き締めるのじゃぞ…！
僅かな隙が命取りじゃ！」

「ええ！おじい様」

ザッ…

『いた…！』

４人は木陰に身を忍ばせ、前方で立ち止まっている鬼を監視した。

「…人間との先の戦いのせいか…。
上手く力が使えぬ…。
力を得ようとしても上手く吸収できぬな…」

ザッ…

「先ほどの人間共か…」

鬼は振り返りもせず、言い当てた。

「主はこの一月…多くの命を奪った…。
故に我等も黙ってはおれんのじゃ……許せよ」

「ふむ…奪われれば、当然に生まれる憎しみよ。

お前たちは正しい。
だが、戦えばどうなるかはお主はわかっているだろう？
先の戦いで力の差は見せたつもりだったが…」

清四郎と明正を見て鬼は言った。

「確かにな…じゃが、今は状況が違うぞ？
こちらは負傷してはいても４人…お主も以前よりは力を落しておるじゃろ」

「…まぁいい…。
せっかく生かしてやったものを…後悔するのだな」

ざわ…！
明らかに空気が変わった。
妖魔クラスの圧倒的な威圧感。
木々がざわめき、鳥や獣は逃げていく。

「はぁぁぁッ！！清四郎殿！明正殿！！行くぞ！！」

３人同時に霊気を高めだした。
葵はすでに動けなくなっていた…。
茜はそれを確認し、戦力として外したようだ。

「かまいたち…烈風刃(れっぷうじん)！！」

「緑珂(りょくか)…命吸鞭(めいきゅうべん)！！」

「破迅(はじん)…壊光弾(かいこうだん)！！」

三方向からの同時攻撃！

茜の無数の風の刃…、清四郎の霊気の鞭による鞭打！

さらに明正の放った光の弾は全て鬼を直撃した。

ドッガーーーン！！

物凄い地響きと共に衝撃風が生まれる。

「…はぁぁぁぁぁ！！」

茜はさらに霊気を高めつつ、後ろに飛んだ。

「皆！下がられよ！！」

茜の一声に皆は茜の攻撃範囲から消えた。

「砕竜の咆哮ッ！！」

バシュッ！！！
突き出した両手から波動砲のような巨大な霊気砲が放たれた。
一瞬にして木々を飲み込み、なぎ倒し、鬼を彼方まで弾き飛ばした。

「はぁ…はぁ…！」

「全て直撃…か。
それにしても”竜気”…とてつもない威力よ。
敵に回すと厄介極まりないが、味方につけるとなんとも頼もしい力じゃな」

「ですな。我々もそれなりの妖魔から能力を得たとはいえ…竜の妖魔には滅多にお目にかかれませんからな。
それ自体かなりのレアだと言えますわ」

「二人とも…終わってはおらぬぞ…気を引き締めい！！」

『！』

茜の声に二人に再び緊張が走った。

「あれで…まだ無事だというのか？」

「まともに食らっておれば、それなりにダメージはあるじゃろうが…。
ありゃまともに食らってなかったかもしれないな」

ザッ…ザッ……

砂煙の中に奴の影が映った。

「やはりか…！」

「…なかなかの攻撃だった…。
お前もその二人同様強いな…」

ほぼダメージがない…。
見た感じからそのような印象を受けた。

――
――

「おらぁあッ！！」

茜たちが死等を繰り広げている頃…
和馬も必死に戦っていた。

「ウォオオオ…」

実体を持たない浮遊する怨霊に手を焼いていたのだ。

「んの…フワフワとうぜぇ！！
（さっきの地鳴りといい…衝撃音といい…。
向こうはもう戦闘に入ってやがるな…！ここでもたついてる場合じゃねぇってのに…！！）」

「ウォアオオオオ…」

「はぁ…時間がもったいねぇわ……本来こんな雑魚に使う技じゃねぇが…。
四の五の言ってられんからな！」

和馬は霊気を全開にした。
凄まじい霊気が和馬を包み込む！

「っくぜぇぇッ！！…破邪！烈波ァァッ！！（はじゃれっぱ）」

和馬を中心に霊撃の波動が辺り一面に広がっていった。

「う…ウオオオオ……」

光を浴び、浮遊していた怨霊は全て掻き消えた。

「はぁ…はぁ……手間取っちまったな…ん？」

和馬が目をやると、由良葉が足を抱えガタガタと震えている。

「…ち！」

和馬は由良葉に近づくと、目線を同じにするように不良座りをした。

「おい小僧…泣いてんじゃねぇよ…ツラ上げろよ」

「うう…」

「はぁ～…俺ぁ今急いでるんだよ…男だろ？」

「…ぐすん…」

由良葉はようやく顔を上げた。

涙に鼻水に…顔面はぐちゃぐちゃになってる。

「あぁ…これだからはガキはめんどくせぇぜ…。
ほら、コイツで鼻水と涙を拭けよ」

和馬はハンカチを渡した。
どう見ても女物だ。

「葵に借りたハンカチだ…あとで返すんだからしっかり持ってろよ。
じゃあ俺はもう行くからな」

「え！？行っちゃうの？」

「お前も男だったら、一人で帰れるよな？」

「でも…」

「でもじゃない！…はぁ…んじゃここで待ってろ…。
すぐにとは行かないかもしれんが、戻ってくるからよ！
まぁ帰りたくなったら帰ってもいいけどな」

「いやだ！おいていかないでよ！」

由良葉はギュッと和馬の服を掴んだ。

「…悪いな坊主…お前を連れてくわけにはいかねぇんだよ。
これから今よりずっと怖い奴と喧嘩しにいくんだからな」

ポンッと由良葉の頭に手をあて、ぐしゃぐしゃっとかき混ぜた。

「わかったよ…」

「いい子だ。…あ、そうだ…俺は和馬だ。
石動和馬。お前は？」

「オイラは神楽由良葉…」

「由良葉か。変わった名前だな。まぁ、戻ってきたら一緒に帰ってやるからよ！
んじゃあな！」

和馬はニコっと笑って、そのまま走っていってしまった。

――――
――

「はぁ…はぁ……」

３人は鬼相手に苦戦を強いられていた。
すでに疲弊も限界に近くなっていた。

三人は連携をこなし、最大限の攻撃をしていた。
攻撃は通っている。
が、それ以上の力と耐久力の前に、３人の方が先に限界に達してしまったのだ。

「もうこれ以上の攻撃は望めまい…諦めろ…強き人間共よ」

「くく…それが出来ればとっくにしとるさ…。
お主が危険な存在である限り、放置は出来んて」

とは言っても清四郎はすでに霊気も上手く錬れないまでに消耗していた。
それは明正も同じく…。
元々負傷した身での参戦は無茶だったのだ。

「…致し方ないの…」
茜は何かを覚悟した。

「茜ちゃん…何を…何を考えておるのじゃ！？」

「”修羅”を使う」

『！』

その一言に清四郎、明正はもちろん、鬼までもが驚きの表情を見せた。

「修羅…我等の一族でも名を馳せた鬼…お前がその力を持つ人間なのか？
噂では聞いていたが…よもや真実だというのか…？」

「いかん！修羅を使えば力の大半を奪われるのはもちろん！
人格、肉体、魂に至るまで奪われかねんぞ！！」

「茜様！」

二人は必死にやめるように説得する。

「このままではどちらにしても死は免れんさ。
ならば１％でも勝てる見込みのある手段を選ぶのは当然じゃろ…。
お主が同じ立場でも私と同じ選択をするのではないかね？…清四郎殿」

「…う…ぐう…！」

清四郎は黙ってしまった。

「おもしろい…もし本当にあの修羅の力を出せるというなら見せて見るがいい…。
我の力がどれほどかを確認する上でも丁度いい」

「後悔をしても遅いぞ……はぁぁぁ…」

茜は気合を入れ始めた。

「修羅の扉を開く……死ぬなよ…私」

ドンッ！！

一瞬にして巨大な気が出現する！
茜を包む霊気が徐々にどす黒く変わっていく。

その禍々しさ、邪悪さは目の前の鬼と然程変わりはない。

「なるほど…邪悪なる鬼気…戯言ではないようだな…。
はぁぁあああッ！！」

鬼も気合を入れる。

凄まじい霊気のぶつかり合いだ。

「くぅ…！！
（なんという邪気じゃ…！修羅を使って自我を保とうとすると…、
これくらいの力加減が限界か…！しかし…これで奴に勝てるのか
…？
奴の全力も侮りがたしものよ…！）」

「さぁ…はじめよう…修羅よ！」

ドッガーーン！！
一瞬にして、地面が破裂した。

地上の清四郎、明正は何が起こったのかもわからなかった。
辺りを土煙が包み込む。

「一体なにが…二人は何処じゃ…？」

「！…親父！上だッ！！」

二人はすぐに上を見上げると、なんと二人は上空にて格闘戦を展開
していた。
ぶつかり合うたびに大気を揺るがす轟音が鳴り響く。

「く…！なんという戦いじゃ…！
わしらが入り込む余地などありゃせんわ！」

「しかし、素晴しいな…あの鬼に一歩も引けをとっておらん！
むしろ上を行っている！」

確かに現在、全てにおいて修羅化した茜は鬼を上回っている。
スピード、攻撃力、霊撃力…全てにおいて。

しかし、この力には限界時間が存在する。
いつまでも今の力を持続するのは不可能。

それをすれば、全てを修羅に乗っ取られてしまうのだ。
今茜は自我を保てる限界のところで打ち合っているのだ。

「はぁあああッ！！」

茜の一撃で鬼が勢いよく落下してきた。

ドッガーーン！！
そのまま地面に激突した。

茜もゆっくりと地面に着地した。

「はぁ…はぁ……」

茜は修羅を解いた。
全身に激しい痛みを感じている。
強力な力を使った反動…。
果たして鬼は今の一撃で倒せたのか…。
第2話　完　　ＮＥＸＴ　ＳＩＧＮ…

第3話　奥里の脅威3

ＳＩＧＮ　外伝

第３話　奥里の脅威３

「く…！」

茜は全身に走る痛みに耐えながら、構えた。

それはつまり、鬼が無事である事を意味していた。

土煙に映る、這い上がる鬼の影。

そして徐に姿を現した。

「はぁ…はぁ……素晴しい…。
流石は修羅といったところか…」

「ま、まさか…あれでも倒せんというのか…ッ！
茜ちゃんの全力だったはず…！」

「万事…休すか……！」

清四郎と明正は、跪きながら、地を叩いて嘆いた。

「…まさか……ここまでとはのう…」

「それはこちらの台詞だよ…人間。
まさかここまで渡り合えるとは思いもよらなかったわ」

「…。

（奴もかなりのダメージを受けておる…。
せめて、私に回復の時間があればのう…。
清四郎殿も明正殿もすでに疲労困憊…時間稼ぎをするには荷が重いか…。
葵殿もあの状態では戦うのは無理……参ったな…）」

「うぉおおおおお！！」

『！』

突如叫び声を上げながら和馬が走ってきた！
皆その声に和馬に目がいった。

「…！これは……！？

ジイさん！？親父さんも…！」

「和馬…！」

倒れる二人に駆け寄る和馬。

「大丈夫かよ…！」

「ワシらはかろうじて無事じゃ！
それよりも、お前は茜ちゃんをサポートするんじゃ！」

茜の方を見る和馬。

「…わかった。二人とも…そこで待っててくれ…。
葵…。
（クソ…完全に戦意を失ってやがる…。
まぁ無理もない…あの鬼野郎の気にあてられちゃ…な。
見る限り、かなり消耗しているが…。
にも関わらず、この突き刺さるような瘴気…威圧感…。
これが妖魔……今までの怨霊レベルとは明らかに一線を引いて違うッ…）」

「くく…仲間が増えたか…。
見る限り…お前も中々いい”気”を纏っているな…小僧」

「ヘッ…試してみるか？
（強がってみても…体は素直だぜ…。
ビビッて足が震えてやがる…汗もじんわり滲んできやがった…）」

「和馬…一つ頼まれてくれんかの…」

茜が和馬の元に歩みよって言った。

「なんだよ…バァさん」

「いいか…奴を一人でしばらく相手して欲しいのじゃ…」

「マジかよ…とんでもねぇ要求だな…」

「無理を承知で頼む…5分……。
何が何でも稼いでくれ…」

「5分……長すぎだろ…ッ…。
まぁ…それでアイツをぶっ倒せるっつーってんなら…。
やってやれないこともないがよ…！」

「私も…覚悟を決めたさ…。
だからお前さんも男を見せる時だよ」

「……ったく…！

俺はまだ死にたくねぇんだけどな…。
ま…アイツを死なせるよりかはいいか…」

「…葵殿か？」

「な、なんでもねーよ！うっしゃ！！
任せとけ！！」

和馬は自分の顔を両手で叩いて気合を入れた。

「話し合いは済んだか？
だったらはじめようか…殺し合いを」

「く…！
（正面に立つとマジで馬鹿デケェ…！
こんなん相手に5分…かよ！）」

ドスッ！！

「！！？」

和馬は一瞬にして木々の向こうに吹き飛ばされた！

「くく…！まだだぞ…まだ始まったばかりだ！」

和馬が飛ばされた方向に凄まじい勢いで駆ける鬼。

「和馬…頼むぞ…！」

――――

「がは…ッ…ゲホッ……はぁ…はぁ……

（動きがまるで見えなかった……。

気がついたら吹っ飛ばされていた……アバラも何本かいったかもな…。

くそったれ…！！）」

「見つけた…。ほう…生きてるか」

「ったりめぇだ…！」

「実際誇っていいぞ？

今の一撃…腹を貫くつもりで殴ったのだ。

貫けぬにしても、立ち上がるまでには至らないと踏んでいたが…。

お前は立ち上がった…それだけじゃなく戦意も喪失していない。

殺すには惜しい男だ」

「鬼に誉められても嬉しくねぇな…チクショウ…！」

「さぁ…再開しよう…」

鬼は構えた。

和馬も構えて集中を始めた。

「…ふぅ……シッ！！」

ドガッ！！

一瞬で間合いに入り込むと、鬼の顎を蹴り上げた。

「…！

（効いちゃいねぇ…！）」

「いい蹴りだ！終わりか！？」

「うらぁッ！！」

鬼のどてっ腹に渾身の右ストレートを放った！

なんと鬼の巨漢を僅かだが、後ろに吹き飛ばした！

「なめんじゃ…ねぇぇッ！！うらぁああッ！」

続いて同じ腹に前蹴りを放つ和馬！

ドスンッ！！

今度は数mに渡って鬼を吹き飛ばした。

「はぁ…はぁ…うっ！！

（腹が痛みやがる…胸も…！）」

「いいぞ…。

人間とは実に面白い生き物だな。

追い詰めれば追い詰めるほど、力を発揮する…」

「…ふぅ……」

満身創痍の和馬は深く息を吐くと、腰を落し、右の拳を突き出した。

「？…霊気が右手に集中していく…」

「お前にコレを受ける勇気はあるか？」

「くく…生意気にも挑発しておるのか？」

「…さぁな？

（破邪真拳…右手に集中した全霊気を打ち出す未完の技だ…。

溜めに時間が掛かる上に、隙もデカイ…。

今の俺の力じゃ実戦で使うには余りにリスキーな技。

だからこその駆け引き…！

乗ってこれば俺の勝ち……そうでなければ……下手すりゃ死ぬな…）」

「いいだろう…面白い！！

撃って来るがいい！貴様の全力を！」

「！（乗った！）…後悔しやがれッ！」

ゴゴゴゴ…！！

凄まじい霊力が右手に集中していく！

霊気がほとばしり、光り輝いていく！

「いいぞ…！もっとだ！

貴様の限界を…命を見せてみろッ！！」

「うわあああああッ！！！

喰らいやがれぇえええッ！！！破邪ぁああッ！！真拳ッんんん！！！！！」

突き出した右腕を一瞬後ろに引き、そして改めて勢いを増して突き出した！

右腕からは勢い良く霊気の波動が放たれる！！
そして、待ち構える鬼に目掛け一直線に向かっていく！！

ドッガーーーーン！！！

波動は鬼に直撃した！
物凄い衝撃音と、風を巻き起こした！

「よしッ！！当った！！ざまぁみやがれ！！」

砂埃が辺りを覆う…。

「…これで終わったとは思ってない…。
だけど…少しでもダメージを与えれれば…それでいいんだ！」

「くっくっく…」

砂埃の中から鬼の笑い声が聞こえてきた。

「！…やっぱり……倒せないよな…」

ザッ！

「…いやいや…素晴しい一撃だったぞ…」

「へっ…！無傷で言われても説得力ねぇっての…
（霊撃痕がまるでない…ノーダメージとか…笑えねぇよ…くそ…）」

「殺せよ…俺にはもうどうにも出来ないからな」

「潔いな……だがつまらんよ。
貴様の底はまだこんなものじゃない…我の目に狂いはない」

対峙する二人を見つめる者がいた。

白い狐の霊…銀だった。

先ほど由良葉を襲っていた怨霊を助けたこの男…和馬を追ってきたのだ。
それには理由があった。

由良葉を救ってくれた事に対する礼を恩を持って返そうと。
そう考えてのことだった。

実は、由良葉が襲われていたとき、銀は木の実を取りに行っていたのだ。
そして、その間の襲撃をこの和馬が救ったというわけだ。

『…鬼か…。
このままではあの人間は殺される…。
だが、奴は友人の恩人……やはり放ってはおけぬな…』

その時だった。

「兄ちゃん…和馬にぃちゃーーん！」

「！！…あの馬鹿！！」

なんと鬼の背後に由良葉が姿を現したのだ。

「！…これは奇遇！」

ダッ！！

鬼は由良葉に目掛けて駆け出した！

「よせえええええッ！！」

「！」

和馬の声に気づく由良葉。
しかし、すでに鬼の爪はすぐそこまで迫っていた。

「うあああああああああああああ！！」

「…なに！？」

なんと、先を走っていた鬼を追い抜き、
和馬は由良葉に覆いかぶさるように飛び掛った。

「に、兄ちゃん！？」

ズブッ！！

「…ば…馬鹿野郎……待ってろって……言ったじゃねえか…」

「和馬…兄ちゃん…？」

和馬の口から一筋の血が流れ落ちる。

鬼の爪は和馬の背から胸へと突き刺さっていた。
なんとかギリギリのところで貫通までは至っていない。

「由良葉……逃げ…ろ……」

そういうと、和馬は気を失った。

「兄ちゃん…？どうしたの…？」

「つまらん……勢い余って殺してしまったか…。
餓鬼を目の前で殺せば、何か力に目覚めるかと踏んだのだがな…」

「！！…あわわわ……」

「？…お前…我が見えているのか？
これは面白い……」

鬼の姿に怯える由良葉…。
その由良葉に迫る鬼…。

その瞬間！

ドガッ！！

物凄い衝撃音と共に鬼の体が吹き飛んだ。

木々をなぎ倒しながら、かなり遠くまで飛んでいった。

「ぎ、銀！」

白狐の銀の一撃だった。

「…酷い傷じゃな…。
このまま放っておけば確実に死に至る」

「ねぇ銀…どうにもならないの…？
オイラを…オイラをかばって兄ちゃんは…兄ちゃんは…」

泣き出す由良葉。

「…わかった…。
この者には恩もある…救おう」

銀は前足を和馬の傷口にあてた。
すると暖かい光が和馬の傷口を包み込んだ。
そして見る見るうちに傷口が塞がっていく。

「これでいいじゃろう…。

暫くは動けないじゃろうがな」

「すごい…」

ザッ…

「問題はこれからじゃな…」

「狐か…。我を吹き飛ばしたのは…」

鬼が怒りの形相をして現れた。

「由良葉…お主に頼みがあるんじゃ」

「頼み…？」

「何をゴチャゴチャ言っている？
その小僧はともかく…狐よ……貴様は殺すぞ」

物凄い威圧感で二人を睨んだ。

「ひぃ…ッ！」

「やむをえんか…しばし体を借りるぞ！」

その瞬間辺りが光に包まれた。

「…く…！下らぬ真似を…！」

「…」

由良葉の雰囲気が変わった。

そして銀の姿が跡形もなく消えた。

「…貴様…」

「さぁ…蹴散らすぞ…」

第３話　完　　ＮＥＸＴ　ＳＩＧＮ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4430i/

SIGN　外伝

2010年10月16日04時49分発行